

令和2年7月豪雨における緊急支援について -新型コロナウイルス感染症流行下での支援経験-

特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン

佐々木 康介

令和2年7月3日～4日未明にかけて九州南部を中心とした豪雨により甚大な被害が出ました。私は特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン(本部：広島県)の医療チーム「空飛ぶ捜索医療団 ARROWS」の一員として発災当日にヘリコプターで熊本県へ支援に入りました。被災地域を上空から見下ろすと球磨川沿い一帯が茶色に染まり、緊急かつ中長期的な支援が必要だと感じました。7月4日～15日(計12日)にかけて救助・捜索活動、救出された住民の健康状態の確認、孤立地域での巡回診療、2次避難所開設に伴う避難所開設・運営支援、物資支援等を行いました。

《半屋外施設に避難する避難者》



私たちは最初に多数の避難者がいるという情報が入った球磨村総合運動公園(さくらドーム)に向かいました。到着して驚いたのは、壁のない屋根だけの施設で、土の上にブルーシートを敷いたところに多くの避難者が避難していたことです。そして、特別養護老人ホームから多数の高齢者が救助され、病院に搬送されるのを待っている状況でした。私は一人ひとりバイタルサインを測定して体調に変化がないか確認して回り、やっと到着した救急車への乗車介助を行い、何とか大きなトラブルなく搬出を終えましたが、この避難所にはまだ300名ほどが避難していました。生活を継続する

には厳しい環境であったため、避難所アセスメントシートの記載や行政関係者への働きかけを行い、2次避難を行う準備を一緒に進めていきました。

《村外での2次避難所開設》



7月6日に2次避難先を村外に開設することになり、避難所の開設準備を行いました。避難者の中には在宅酸素療法を行っている方や体の不自由な高齢者も複数おり、「ケアが途切れる」＝「生活継続が困難」であると痛感しました。

しかし、近所の方が見守りやトイレ介助、買い物代行などを自発的に行い、地域のコミュニティーがしっかりしていることを肌身で感じました。新型コロナウイルス感染症への対策も必須であり、管轄保健所とも協力しながらマスクの配布やパーテーションの早期設置、体調不良者の早期発見と対応などの対策を進めました。

《新型コロナウイルス感染症下での活動を行って》

新型コロナウイルス感染症下において、初めての大規模災害であり、多数の避難者が一堂に集う避難所は感染拡大リスクが非常に高く、発災早期から3密を避けるなど感染症対策が急務でした。しかし、新型コロナウイルス感染症に関すること以外にも災害急性期に見られる特徴的な課題がいくつも挙がっており、感染症への対応だけに気を取られないよう注意しながら活動を実施しました。熊本県では2016年に熊本地震を経験し、その際に活動した行政職員や支援者が今回も活動をしていました。経験から学ぶことは多く、その経験がきちんと今回の災害に活かされ、スムーズな活動に繋がったのではないかと思います。新型コロナウイルス感染症による影響が落ち着くにはまだもう少し時間がかかることが想定されるため、感染症流行下でも安定した知識と技術の提供ができるように今後も研鑽を積んでいきたいと考えています。